

地域調査にもとづく「地域のためのデザイン」の試み

工藤芳彰

1 はじめに

坪郷英彦先生と初めてお会いしたのは筆者が拓殖大学大学院工学研究科に進学してまもなくの頃で、場所は先生の前任校である東京家政学院大学の研究室であった。偶然、先生が卒業研究を指導した学生と同じ研究室に所属した縁で、九州芸術工科大学（現九州大学）芸術工学部工業デザイン学科の同窓であった筆者を招いて下さったのである。大きな窓のある研究室は、向こうに見える山の緑も美しく、先生の素朴な人柄とあいまって、とても居心地がよかったことを憶えている。

以後、先生には親しくお声かけ頂いた。院生時代に山梨県塩山地域の民俗調査をお手伝いしたことや、大学教員になってから東京都八王子市の山車調査で協働したことは強く印象に残っている。それらをとおして得られた知見は、現在、学生とコミュニティデザインのサポートに取り組む筆者にとって、かけがえのない財産となっている。また、筆者が担当する講義科目「地域とデザイン」は、宮本常一著『民俗学の旅』（宮本 1993）等の読解にはじまり、日本内外のソーシャルデザインの事例分析にいたるのだが、デザイナーの職能理解の一助として紹介する職人の仕事例として、先生が東京家政学院内の博物館に収蔵された秩父地域の竹籠コレクションを紹介するなど、授業の構成や内容に先生から学んだことを活かしている。

以上のように、デザインを学び、地域調査研究の道に入られた坪郷先生は筆者にとって、本稿の表題でもある「地域調査にもとづく地域のためのデザイン」のいわばメンターであるのだが、実はもう一つ、上記した大学院の同級生は現在の筆者の連れ合いであり、文字どおり公私にわたりお世話になっている。この度、先生はめでたく定年退職されるとのこと、今後ますます「地域のためのデザイン」に尽力されるであろうとの思いから、筆者が本紀要のタイトルにある地域社会学とは畑違いであることをご容赦頂き、先生と協働させて頂いた上記山車調査をきっかけに、毎年巡行に参加するに至っている筆者の指導学生・田場直也君の修士研究（2010年度）の概要を紹介させて頂きたい。

2 八王子南町の山車巡行を事例とした祭礼文化の継承を支援する地域学習ツールのデザイン（概要）

2.1 研究の背景

古来より、祭礼は住民間のユニバーサル・コミュニケーションの手段として、また、地域社会の結びつきの象徴として、極めて重要な役割を担ってきた。情報社会が展開する現代においても、大小さまざまな祭礼が、地域づくりの要として注目を集めている。

祭礼は継承されることを前提とするため、後継者の育成システムを内包している。本研究で取り上げる山車巡行についていえば、将来を担う子どもたちのために、特定の先導役や曳き手役を用意している。しかし、このような仕組みも、若年層が祭礼に参加しなければ機能しない。今後、さらに少子化傾向が進むことを踏まえれば、小学校中学年の地域学習など、限られた機会を通じて、祭礼に関する若年層の関心を高め、参加をうながすための仕組みづくりが必要である。

2.2 調査対象とその選定理由

東京都八王子市では、例年8月初旬に『八王子まつり』が開催される。その核となるのは、中心市街地（以下八王子）の鎮守2社の氏子町会が所有する山車 19 台の巡行である。見事な彫刻が施された山車の巡行は、多くの人々を魅了し、2010（平成 22）年度は68万人強の来場者を数えたり。

本研究の調査対象は、山車の所有町会の一つである南町の祭礼である。選定の理由は、同町会が、都市化による町会員の減少や、先に述べた少子化問題に直面しており、巡行継続のため、2003（平成 15）年、新たに祭礼組織を設立し、積極的に町外から協力者を募るほど、祭礼文化の継承問題を抱えているからである。

2.3 研究の目的と方法、手順

本研究は、祭礼の継承問題を抱える八王子市南町の山車巡行を事例として、祭礼に関する若年層の関心を高め、参加を促すために、地域教育ツールをデザインするものである。主たる研究の方法と手順は以下のとおりである。

- ① 祭礼参加による資料収集（2008～2010 年度）
- ② 祭礼組織構成員に対するアンケート調査（2010 年 3 月）
- ③ " インタビュー調査（随時）
- ④ 地域教育ツールのデザイン（2010 年度）

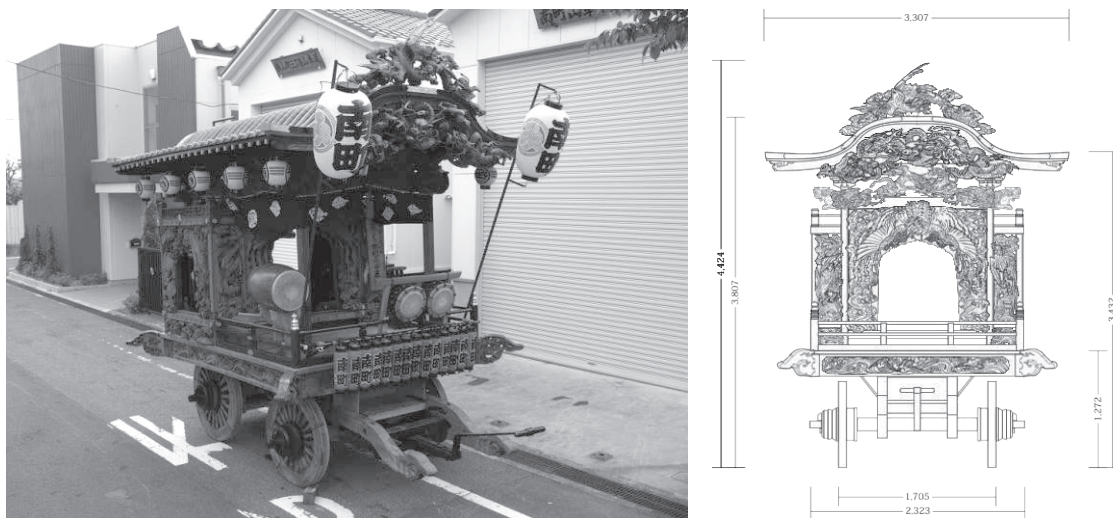


図1 山車庫前に曳き出された八王子市南町の山車（市指定有形文化財）と正面図

なお、既往の研究については、祭礼調査に関して、文化人類学や民俗学を中心として、多数の事例が確認できるが、祭礼参加の仕組みづくりに関する提案を目指したものは確認できなかった。八王子の山車文化に関しては、その第一人者である相原悦夫の著作を参考とした（相原 1975、2000、2006）。

2.4 南町の山車とその利用形態

2.4.1 南町の山車の概要

南町の山車（図1）は、1897（明治30）年の大火によって焼失したものを、1906（明治39）年に再建したもので、江戸期の山車の特徴を伝える「一本柱立ての人形山車」である。大きさは、高さ約4.5m、幅約3.3m、長さ約5.1mである。デザインは大工棟梁の小町小三郎と、宮彫師の小松重次郎光重である。現在は唐破風の銅葺き平屋根であるが、かつて屋根は垂木に布を張っただけの簡易なものだったという。車輪は前後2軸の4輪で、梶棒付きの前車軸が中央のベアリング機構によって回転する。方向転換のためにジャッキなど他の道具を必要とせず、円滑な巡行を可能にしている。巡行時には、軒下に提灯が並び、囃子台に幕がかかる。山車の前部には2対の高張り提灯が取り付けられ、背面の楽屋入り口には簾がかかる。山車彫刻は正面の鬼板と懸魚、妻飾り、四方の欄間、楽屋を取り囲む花頭窓や腰板、大輪とその四隅の木鼻などに見ることができ、すべて白木のままの仕上げである。電線架設以後、人形と岩座を取り付けた一本柱を屋根に立ち上げることができないため、山車の背面中央に屋根から楽屋床面まで入ったスリットは、後の改修時に一部を残して塞がれている。

2.4.2 巡行の様子

『八王子まつり』2日目にあたる祭礼初日、山車は午前中に会所を出発し、八幡八雲神社までの往復を兼ねて、町内を巡行する。午後は近隣を巡り、夕方以降は国道20号（旧甲州街道）上を他の山車とともに巡行する。祭礼2日目は、午後から町内を巡行した後、国道上で渡御する神輿を迎え、夕方より前日同様に巡行する。

基本的な巡行の方法は変わらないが、『八王子まつり』に組み込まれている関係で、毎回、新たな演出が試行され、多少のスケジュールやコースの変更が確認される。

2.5 南町の祭礼組織の現状

2.5.1 南町の祭礼組織

南町の祭礼組織は、町会を母体とする「南町祭礼実行委員会」と、その実行委員会に他の町民や町外協力者が加わった「南町應神睦」、町外の鳶職人が務める「頭」、町田市の囃子演奏グループ『みつめ囃子』によって編成される。この他、祭礼本部となる神酒所や休憩所などの準備については、町会関係者がサポートする。巡行に際し、町会とは別に実行委員会を組織されるのは、政教分離の観点から、氏子まつりを市民まつりに組み込むための方策である。

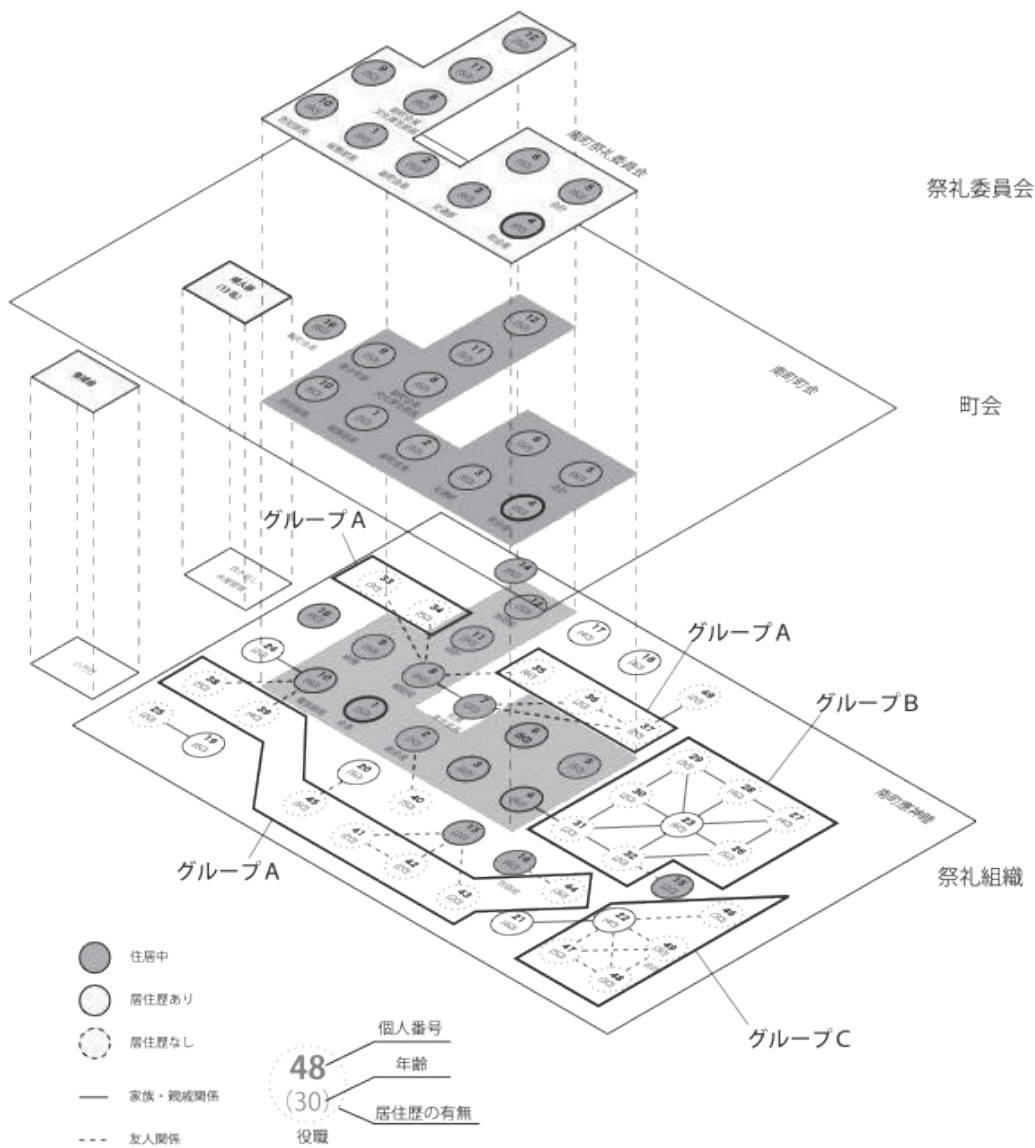


図2 アンケート調査にもとづく南町應神睦構成員の関係図

2.5.2 「南町應神睦」の概要と構成

図2は2009年度の南町應神睦の会員82名中49名の関係をまとめたものである。図中下段は南町應神睦、中段は南町町会、上段は南町祭礼委員会について記している。49名のほとんどは、ここ数年の巡行に参加している人々である。よって、図2は同会の会員構成をほぼ表しているといつてよい。凡例に示したとおり、太字で示した数字が個々の会員を示し、その下に括弧付きの年代を併記した。役職のある者については円の下に役職名を付記した。居住歴については円を表示する線表現と内部の網掛けによって表した。すなわち、実線かつ内部の網掛け有りが町民、実線かつ内部の網掛け無しがかつての町民、点線

が南町の居住歴のない者である。会員同士の人間関係については、実線のつながりが親戚関係を、点線のつながりが友人関係を示している。

会員同士の関係についてみていくと、應神睦を構成する特徴的な3つのつながりが指摘できる。まず、図2中に示したグループAのように、町民あるいはかつての町民とその友人のつながりがある。特に、現町民のなかには、No.8、7、13のように、複数の友人を会員にしている例がみられる。なお、グループCのNo.22はかつての町民で、4名の友人を会員にしているが、これについては後述する。次に、グループBに示した町民とその親戚関係によるつながりがある。このグループは、町内で老舗の飲食店を営むNo.4とその親族によって形成されている。調査年度において、No.4は町会長を務めていた。最後に、前述のグループCである。このかつての町民とその友人たちのグループは、手話サークルの仲間である。

以上のように、南町の山車巡行を支える「南町應神睦」は、管理運営を担当する少数の町民と、転出後もサポートを続けるかつての町民、一部の町民の親類を含む多数の町外協力者によって形成されていた。

2.5.3 山車と巡行に対する「南町應神睦」構成員の意識

アンケート調査の結果、祭礼実行委員会の構成員や町民は「山車は町の誇り」「祭りは人生そのもの」「物心ついた頃には山車を曳いていた」など山車や祭りに関して強い意識がうかがえた。人形の導入に携わった者は「仲間と作った大切な物」という意識があるものの、導入に携わっていない者は「先代の山車人形に比べて劣る」と感じていることもあった。中心となっている者の中には「人形を山車の上に乗せたい」という声があった。

グループAには「人形はなんだか触り難いもの」というような少し中心から距離をおく意識があるが、「町外者を受け入れてくれた」という感謝の気持ちがみられる。「酒が飲めるから参加している」など比較的気軽に参加している。グループBは「祭りは親族との顔合わせ」「代々参加するのが当然だった」など幼い頃から祭りに参加していることがうかがえる。「子や孫と一緒に山車を曳いているのが幸せ」など山車まつりの継承に積極的な声もあった。グループCは「祭りは新しい刺激」などグループA同様気軽に参加している。一方では「山車人形の顔が腹話術の人形のような」「無理に人形を山車の上に乗せる必要はない」という声もみられた。

2.6 若年層の祭礼参加を促す地域学習ツールのデザイン

前項までの調査によって把握した南町の祭礼の実体を踏まえ、若年層の祭礼参加を促す学習ツールをデザインした。具体的には、祭礼組織の関係者が使用するためのカードゲームと動画コンテンツである。

2.6.1 カードゲーム『山車の札』

「山車の札」（図3）は山車の巡行を構成する人と物を単純化したカードゲームである。プレーヤは遊びをとおして山車巡行に関わる役割や道具に関する知識を得つつ、巡行を疑似体験する。このことにより実際の巡行に対する理解と関心を深める。

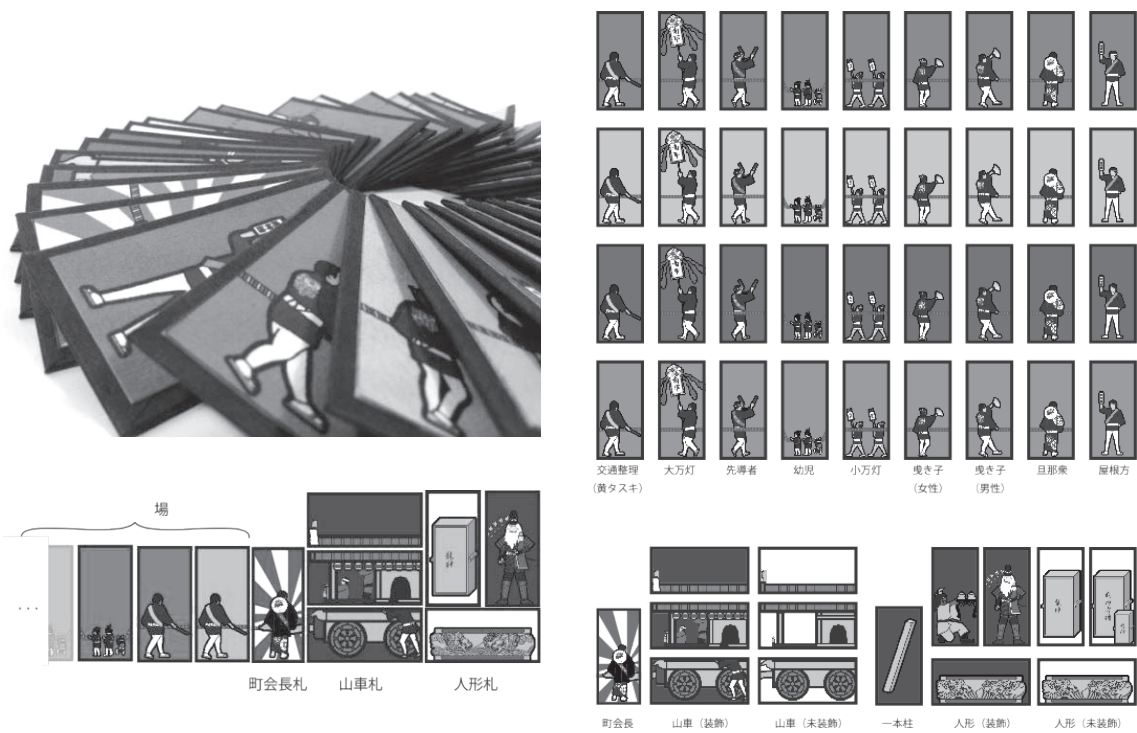


図3 南町の山車巡行をモチーフにしたカードゲーム「山車の札」

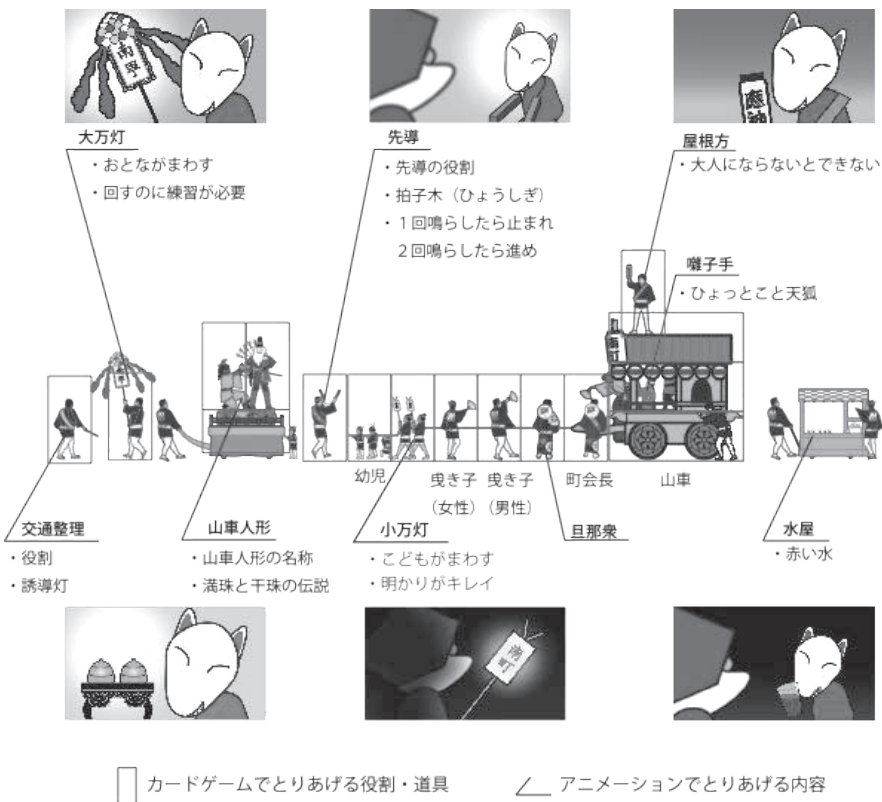


図4 カードゲームと動画コンテンツの関係

「山車の札」には「町会長と子どもたち」「町内まわし」「ひきまわし」「たちあげ」という4種類の遊び方があり、段階的に知識を習得することができる。

2.6.2 動画コンテンツ『ひょっとこくんときつねさん』

この動画コンテンツでは山車巡行を構成している人の役割や使用している道具について知ることができる。動画コンテンツの構成は1話につき30秒で、ひょっとこくんときつねのやりとりで知識を得ることができる。図4は動画コンテンツと上記のカードゲームとの関係を示したものである。

2.6.3 提案に対する関係者の反応

カードゲームについては、関係者から、次回祭礼時に配りたい、他の町会の分も作ってほしい、自分が携わっている役割の札があり嬉しい、という意見を頂いた。特に、絵柄について、誰がモデルになったかについて、活発な議論がおこった。また、会員の子ども（小学3年生女子）は強い関心を示し、周りの大人に対して質問をはじめた。加えて、地元のこどもたち9人（小学6年生男子1人、小学5年生女子6人、小学3年生女子、幼稚園年長男子）にプレイしてもらったところ、山車を見たことあるが曳いたことはないので興味を持っていた。祭礼の参加経験がある子どもは、カードの絵柄が南町の山車や山車人形であることを認識していた。経験のない子どもも関心を高めたようであった。

アニメーションに関してはキャラクターが親しみやすい、こどもが山車に興味を持つきっかけになる、南町應神睦の集会の際に上映したいなどの意見があった。

2.7 総括と今後の課題

今後、南町の祭礼組織は、短期的には南町應神睦の会員数を維持していくことが求められる。しかし、今後はますます睦役員の高齢化が進むこと、次代を担う若手の町会員が限られていることを踏まえれば、町内を含め、近隣の若年層を何とかして巡行に参加させることが求められる。検証の結果から、今回提案した地域学習ツールには、大きな期待が得られ、また、ある程度の効果が見込めると考えている。

カードゲームと動画コンテンツについては、南町應神睦の関係者に利用してもらいながら、若年層の勧誘にどれだけ役立つのか、長期的に検証していく必要がある。

3 おわりに

超少子高齢・人口減少時代に突入したわが国において、21世紀はソーシャルデザインの重要性がかつてないレベルで高まっている。さまざまな地域課題を考えていく上で、これまで積み重ねられてきた民俗学的知見が、例えばコミュニティデザインの資源として、あらたな役割を担いつつある。その意味では、生活者と地域調査者、デザイナーの垣根が極めて低くなり、積極的に協働する時代が到来したといってもよいだろう。今後の坪郷先生のご活躍とこれまで同様のご教授を願って、本稿の末尾としたい。

[注]

- 1) 『八王子まつり』については公式ホームページ (<http://www.hachiojimatsuri.jp/>) を参照のこと。

[参考文献]

- 宮本常一, 1993, 『民俗学の旅』 講談社学術文庫
相原悦夫, 1975, 『八王子の曳山祭』 有峰書店
同上, 2000, 『目で見ると八王子の山車まつり』 のんぶる舎
同上, 2006, 『彫刻師佐藤光重』 ぎょうせい

所属：拓殖大学工学部デザイン学科
E-mail アドレス：ykudo@id.takushoku-u.ac.jp